

フリースクールの学びに関する質的検討

○金城千尋 (株式会社 Ecold)

斎藤富由起 (千里金蘭大学)

キーワード：フリースクール

問題と目的

フリースクールとは、公的な制度上の学校の枠組みを超えて、自由な教育活動を志向する教育団体または私塾を指す(斎藤, 2016)。また、教育上の課題としても注目されている不登校の生徒数も増え続ける中で、学校という枠組み以外の場所であるフリースクールに、居場所を見出す子どもや保護者も少なくない。

これまでの研究では、フリースクールにおいての子どもの居場所としての役割に焦点が置かれてきた。しかし教育的な効果を促す居場所とはどのような体験を促すネットワークなのかは明らかではない。これはフリースクールの活動が多様で、経験則が導きづらいという要因もあるが、フリースクールでの学びを質的に検証した研究が乏しいことも挙げられる。そこで本研究では、フリースクールのボランティア活動のアクションリサーチを基に、日々の子どもの活動の中に、どのような学びがあるのか質的に検討する。

方 法

調査対象者

2016 年から 2018 年の関西地方のフリースクールでのボランティア活動に対して、この分野に詳しい学校心理師、臨床心理士、大学院生が半構造化面接を実施した。質問の内容は①ボランティア体験の内容、②そこでの学びの性質であった。得られた回答は公教育との比較を軸として KJ 法によりまとめられた。

結果と考察

自由であることでの学び

フリースクールではイベントが用意されている目もあるが、多くの目を子どもたちは自分の活動内容を自分で選択し、それを実行することで過ごす。そこに公的な制度上の学校では中々学ぶことのできない、二つの学びが発生する。一つ目は、一日の活動内容が決まっていな自由の中で、自分のしたいことを選択していくことでの学び。二つ目は、選択したことを自由な場で実行することでの学びである。

一つ目の、自由の中での選択する学びについて、制度上の学校では、時間割があり、進路についても幼稚園または保育園から高校まで進むことが前提として考えられており、そのための勉強をしておけば、子ども時代の大半を過ごすことができる。そこで起こる弊害が、「今自分は何をしたらいいかわからない」というものである。

これ対して、フリースクールを巣立つ子どもたちは、将来的なビジョンがより明確であった。それは、日々の活動で様々な選択の自由がある中で、自分に向き合い、自発的な希望を選択する体験が基盤になっている。

二つ目の、自由な場で実行する学びとは、選択したものを、どのように実行するか、どのような形で実現させ、そのためにどのように行動するかを考え、実際に行動に移すことでの学びである。

自分にしたいことがわかっている、次は「どうすればいいかわからない」と行動に移せない子どもの声がある。それは、今まで制度上の学校では、実現の方法を、一定程度おとなが提示していたからである。しかしフリースクールでは、日々選択の自由があるとともに、選択したものをどのように実現させるか思考し、実行することで、その日の子どもたちの活動となる。

このように選択すること、自ら計画し、提案し、行動することの自由が保障されているからこそ、責任ある自己決定を子どもたちは学んでいく。それは、自分の人生をどのようなものにしていくか、デザイン力とつながるだろう。

協働的でクリエイティブな思考力

自由な場が保障され、自分で自分の活動をデザインしていく中で、一人では実現することが難しいものもある。そのような時には、子どもたちで話し合う時間が設けられる。そこで行われる話し合いにも、選択する自由と行動する自由が保障されている。それに伴い、相手の意見を吟味し、且つ自分の意見を反映させることを考え、発言する。その思考を子ども一人ひとりが行い、話し合うことによって、子どもたちは協働的でクリエイティブな思考力を学んでいる。

リファラー (referrer) としてのおとな

上記のような子どもたちの学びを保障するために必要なおとなの役割は、「評価者としてのおとな」ではなく、「子どもの未熟さを受容しつつ、その志向性をフォローするおとな」が求められている。

あくまで選択するのは子どもであり、提示された情報の良し悪しを決定するのは、子どもたちなのである。そのため、おとなに求められる役割は、あくまで子どもたちの選択の参考になるリファラーとしての存在と考えられる。

引用文献

斎藤富由起・守谷賢二 (2003). 教育相談の最前線—歴史・理論・実践 八千代出版